

## 巻頭言

## 修士論文の組み立て

神奈川大学大学院経営学研究科委員長

松 浦 春 樹

経営学研究科の「研究年報」もここに第9号を発行することになりました。研究科の教員責任者として喜びに堪えません。編集にあたられた経営学研究科担当後藤伸教授、博士後期課程湯川恵子君、事務局西原聖織氏をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。経営学研究科も平成17年度後期入学試験の志願者数が、横浜キャンパスの経済学研究科、法学研究科を上回ることになり、志願者数が上向きに安定しております。これも皆さん地道ながんばりの賜物であると考えています。

第8号の巻頭言（モデルと現実と：大学院の役割）において、どのような論文を書けばよいのかの一つの回答として、「実務に役立つ地図を作ることが論文作成の目的であり、その地図が実務（の改革）に役立つようなものであれば申し分ない」と述べました。今回は、論文をどのように組み立てればよいのかについて、一つの回答を以下に示したいと思います。

論文のテーマが大きな問題設定となります。この問題に対する回答が結論部です。論文冒頭の問題設定から問題の回答である末尾の結論部までを、論証で埋めてゆくこととなります。大きな問題設定から結論に至る過程を、章として中くらいの問題設定に分解し、この中くらいの問題設定に対する回答を章の結論とします。章の中身は中くらいの問題に対する回答に至る論証を書きます。章の中の論証過程も、小さな問題設定とその回答として組み立てて行きます。

要は、細かな問題設定とその回答を部品として、全体を論理的に組み立てて最終的に大きな問題設定に答えるように書けば、読み手にとって大変クリアな論文となります。個々の部品から書いて行ってもよいし、大きな問題設定から書き始めてもよいで

しょう。組み立て作業の途中で大きな問題設定が変わってくるのがあってもよいでしょう。世評の高い専門書の多くはこのように書かれていると考えています。たとえば、藤本隆宏氏の「能力構築競争」中公新書（2003）をご覧ください。

末筆になりますが、本年度修了する皆さんの今後のますます充実した人生航路と、在学生の皆さん一人ひとりの大いなる成果を期待しています。